

# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみに重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画には見られない別の優れた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から〈短篇・文化・記録映画特集〉番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観覧者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1980年3月 フィルムセンター

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般 200円・学生 140円・小人 100円

## 4月5日(土) 午後1時開映

### 現代彫刻——創る

——本郷新の世界——

美術映画製作協会1973年作品

製作・監督＝柳川武夫 脚本＝松江泰造  
撮影＝鈴木斌、石松健男 音楽＝松村植三  
解説＝鈴木瑞穂 カラー 31分  
〈かいせつ〉

1905年札幌市に生まれた本郷新は、東京高等工芸学校彫刻部(現千葉大)を1928年に卒業するが、その前後から高村光太郎に師事し、日本彫刻界に新風を吹きこんだ。映画は、大阪に設置される「緑の賛歌」の製作過程をデッサンから完成にいたるまでを追跡して描いている。また、モニュメント作家として活躍する本郷が故郷北海道をはじめ広島、鹿児島等の各地に設立した作品をインサートの紹介にしている。美術映画製作協会の美術映画第一作にあたる作品となった。

### 明治の洋風建築

桜映画社1972年作品

企画＝文化庁 製作・脚本・監督＝村山英治 撮影＝木塚誠一 音楽＝山内忠  
解説＝久米明 カラー 28分  
〈かいせつ〉

明治という歴史の一大転換期を象徴するものうちで、明治洋風建築はとりわけ当時の人々が新しい文明に触れた時の衝撃とそれに近づくようとする努力や創意工夫を生き生きと伝えてくれる。この映画は日本全国に点在する洋風建築の姿をその様子を説明しながら映してゆく。グラバー邸・旧岩崎邸などの民家、ニコライ堂・聖ヨハネス教会堂といった教会のみならず、病院・商社・官公庁舎なども網羅されている。〈日本文化シリーズ〉の第4作として企画され、芸術祭大賞・キネマ旬報ベスト・テン第1位ほか多くを受賞している。

### 水車から電気へ

東京文映1978年作品

企画＝科学技術庁 製作＝土屋祥吾 進行＝永原幸太 脚本・監督＝米内義人  
撮影＝松本俊世 音楽効果＝プロダクツ71 解説＝千葉耕市 カラー 17分  
〈かいせつ〉

今日では産業動力の要となった電気とそれに伴う技術が、日本に輸入され日本それに発達してきた様子を解説した作品である。明治期の日本を代表する製糸産業が水車動力中心から蒸気機関を導入してゆく様子、また日本人の手になる最初の大規模土木工事である琵琶湖疏水工事が当初水車動力と舟運を期待して計画されながら、アメリカ視察から帰った田辺朝郎技師の発案で電力利用へと変更された経緯などが説明されている。西欧の科学技術を導入してゆく日本の歴史的背景と文化の土壌を解明するのに好個の教育映画であると言えよう。

## 5月10日(土) 午後1時開映

### よみがえる金色堂

日映科学映画製作所1970年作品

企画＝中尊寺 製作＝片田計一 脚本・演出＝中村鱗子 撮影＝中山博司、石原保 音楽＝長沢勝俊 解説＝平光淳之助  
カラー 44分  
〈かいせつ〉

岩手県平泉にある国宝中尊寺金色堂は12世紀の格調高い平泉文化を今に伝える日本文化財の至宝に数えられている。

1億6千万円を費やし、昭和37年から7カ年におわたって続けられたその修理復元工事を、解体部材の基礎的調査から始まって、赤さびの除去、蟻鈿の修理・補足、組立工事、金箔押し作業、上棟式・還座式・落慶式に至るまで順を追って丹念に記録したのがこの作品である。

脚本・演出に当たった中村鱗子は、「明治の絵画」「文楽」など、伝統的な古典芸術に取材した映画を数多く作ってきたベテランの女流映画作家で、金色堂の外観描写にとどまらず、堂を支える巻柱の復元作業などを集中的に撮影し、随所に女性らしい細やかな配慮をうかがわせている。

現代の建築・工芸技術の粋を集めながら、あくまで元の材質の復元ということに重点が置かれているあたり、単なる建築作業の記録である以上に美術工芸映画としても興味深いものがあるだろう。1970年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第2位その他を受賞している。

### 絵図に偲ぶ江戸のくらし

——吉左衛門さんと町の人々——

岩波映画製作所1977年作品

企画＝文京区教育委員会 製作＝安達弘太郎、陣内直行 脚本・演出＝時枝俊江  
撮影＝八木義順、山口豊寧 演奏＝尾崎有一、望月太八 解説＝伊藤忍一  
カラー 33分  
〈かいせつ〉

江戸時代、武家大名の住宅地であった現在の文京区の歴史は、そのまま往時の庶民生活を偲ばせるものであるが、この映画は、安政時代の髪結床《えび床》伊せや吉左衛門という人が書き残した詳細な2巻の絵図を手がかりにして安政末期の日常生活をコラージュ風に構成したものである。

対照的に提示される現在の東京風景が印象的であると同時に、昔の人々の生活にも今と極めてよく似た部分があることを知ることもできるだろう。町の情報屋としての役割を担っていた床屋吉左衛門さんと町民との貧しくもユーモラスなエピソードの数々が心に残る。1978年度キネマ旬報ベスト・テン第1位、東京都教育映画コンクール金賞ほかを受賞している。

## 6月7日(土) 午後1時開映

### 輪島塗

日本シネセル1974年作品

製作＝佐藤吉彦 脚本・演出＝高井達人、黒田晴夫 撮影＝渡部克一、河村圭司  
照明＝大友敏法、土田正雄 音楽＝吉田征雄 ナレーター＝和田篤 カラー 30分  
〈かいせつ〉

能登を代表する伝統工芸、輪島塗の技を刻明に描いた作品。木地づくり、漆のぬり、文様を施す加飾という輪島塗の基本的な3つの工程を描き、それらに必要とされる型はつり師や木地師たちの高度な熟練と名人芸が明らかにされる。加飾の一種で、彫った溝に金や銀の箔などを施す沈金彫りの人間国宝大峰の作業が丹念に撮影されている。一つの腕に費やされる手間ひまの数々が静かな感動を呼ぶだろう。

### 黄八丈

東京都映画協会1973年作品

企画＝東京都教育庁文化課 製作＝後藤和則 脚本・監督＝市川春雄 撮影＝三枝弘夫、藤田定一 音楽＝芳賀三千生  
解説＝芦沢俊美 カラー 27分  
〈かいせつ〉

洗い込むほどに色が冴えるといわれる八丈島の特産品、黄八丈の伝統と技術を紹介した作品である。黄、樺、黒の3色を染め出すそれぞれの工程を細かく追いながら無駄のない編集で見せている。何気ない作業の内に並々ならぬ技の冴えが表出してきて観る者を感動させずにはおかない。この伝統を守り続けるのは70歳を過ぎる山下ゆめさんで、彼女が一つ一つ語る祖父と惣右衛門の思い出が黄八丈の技を伝授された昔のことを語っていて興味深い。1973年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第6位受賞。

### 海と風と太陽

シブィ・フィルムズ1978年作品

企画＝三菱商事 製作・構成＝狩谷篤  
撮影＝瀬川順一 音楽＝原田甫 カラー 18分  
〈かいせつ〉

メキシコの太平洋側に突き出たパハ＝カリフォルニア半島の中ほどケレロ・ネグロには広大な塩田があり、ここで生産される塩の約3分の2が日本へ輸出されていることは余り知られていない。三菱商事とメキシコ政府との合弁運営によるモデルケースとしても珍しく、三菱の企画によってその全体像が明らかにされたのがこの映画である。塩水の蒸発池や結晶池等の描写も当を得ており産業文化映画として良質の出来映えとの評価を受けた。また干潟に遊ぶ水鳥・アザラシなどの自然描写、教会での結婚式の様子なども取り入れて盛りだくさんな内容になっている。キネマ旬報第7位。

# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には《珠玉の短篇》という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1980年6月 フィルムセンター

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入替え制になります。

一般 200円・学生 140円・小人 100円

7月5日(土) 午後1時開映

——羽仁進監督特集——

教室の子供たち—学習指導への道—

岩波映画製作所1955年作品

企画=文部省 製作=吉野馨治 脚本・演出=羽仁進 撮影=小村静夫  
白黒 29分

〈かいせつ〉

下谷のある小学校2年生のクラスにカメラを持ち込んで、様々な個性を持つ児童たちのありのままの姿を撮影し、短篇記録映画の世界に新風を吹き込み、羽仁進の名を一躍世に知らしめた作品である。180ミリ程の望遠レンズを教室に据えて、いわば《公然とした盗み撮り》といった手法で子供たちの表情を生き生きと捉えることに成功しており、後に羽仁が試みた劇映画におけるドキュメンタリーの実験を理解する上でも重要な意味を持っている。ブルー・リボン賞ほか受賞。

法隆寺

岩波映画製作所1958年作品

企画=文化財保護委員会 製作=吉野馨治 脚本・演出=羽仁進 撮影=瀬川順一 音楽=矢代秋雄 解説=芥川比呂志  
カラー 23分

〈かいせつ〉

世界最古の木造建築であり、仏教美術の宝庫でもある大和法隆寺の美と伝統を追った作品。伽藍の配置の説明から五重塔とその塑像群・玉虫厨子、また金堂、釈迦如来像とその天蓋、さらに百済観音、夢殿と救世観音などが丹念に映し出されてゆく。肉眼では決して捉えることのできない古代彫刻の彫りの深味、複雑微妙な表情などが照明とカメラ・アングルの工夫によって巧みに表現されている。羽仁の演出は、羅漢像の顔から人間的な表情を発見することに大きな力を注いでいる。芸術祭賞などを受賞した。

双生児学級—ある姉妹を通じて—

岩波映画製作所1956年作品

企画=文部省 製作=小口禎三 脚本・演出=羽仁進 撮影=小村静夫、今野敏一 パート・カラー 39分

〈かいせつ〉

文部省の現職教育のために企画された一連の短篇映画のなかで、「絵を描く子どもたち」に続く羽仁進の作品である。中野にある東大附属中学には毎年20組程の双生児が入学してくるが、この映画は彼らと一年間生活をともにしながら、一卵性双生児の上杉さん姉妹の行動や態度を追跡したものである。二卵性と違って、同じ遺伝素質を持って生まれた一卵性双生児を観察してその違いを考察することによって、遺伝と環境とが人間形成に与える影響を明らかにしようという試みである。姉妹の描いた絵などがカラーで撮影されている。ベスト・テン第4位。

8月2日(土) 午後1時開映

——山——

雷鳥の四季

岩波映画製作所1979年作品

製作=内藤完七 演出=片山龍峯 撮影=加藤孝、山田元一郎 音楽=山崎宏 録音=岡本光司 ナレーター=大前田広 協力=湯浅輝久(立山雷鳥研究会)、富山県自然保護課 カラー 30分

〈かいせつ〉

絶滅の危機が伝えられる特別天然記念物ライチョウ(Lagopus Mutus)の生態を長期間にわたって北アルプス立山で撮影・記録したものである。この映画は、母鳥の抱卵によって卵が孵化する瞬間を初めて撮影したこと、また、そのヒナが一人前の成鳥になるまで同じ親子を徹底的に記録して一羽の雷鳥の生活史を明らかにしたことにおいて画期的である。氷河期の残存動物といわれる雷鳥の不思議な生命力が画面に溢れている。

特別天然記念物 ニホンカモシカ

行動と生活の記録

東映教育映画部1979年作品

企画・構成=布村建、北川英雄 撮影=北川英雄、久島乃乃、田中義信、松本寿夫 音楽=杉田一夫 解説=伊藤惣一 協力=米田一彦(秋田県鳥獣保護センター) カラー 28分

〈かいせつ〉

ニホンカモシカは、近年その食害によって社会問題になっているが、この映画は、その生態を数少ない研究データに基づきながら、秋田県大平山、新潟県黒川村、岐阜県小坂町等で長期間撮影した科学映画である。わが国ではニホンザル、キタキツネ等を除けば野生哺乳動物の生態を描いた映画は極めて少ないが、スタッフは、生息条件の困難さにも拘らず、500ミリ-1000ミリの望遠レンズを駆使してニホンカモシカの謎に肉薄している。

富士山—その植物社会—

記録映画社・教育映画配給社1973年作品

製作=古川正思 脚本=上野耕三 監督=上野耕三、古川正思 撮影=古川直木 ナレーター=棟方宏一 指導=高橋道彦 カラー 23分

〈かいせつ〉

昭和39年、富士山に「スバルライン」が開通して以来、三合目から五合目にかけて道路の両側のシラビソ、コマツガなどの亜高山帯植物が枯れ始めた。この映画は、その原因を様々な植物の分布や相互関係を検討しながら解明しようとしてきたものである。長い間に植物社会を成立させてきた、複雑にからみあう生態系の遷移・平衡が、小さな人間活動の介入によって乱され破壊されてしまうという事実が語られている。富士山を《内側》から描いた点で珍しい作品といえよう。

9月6日(土) 午後1時開映

——日本の伝統——

柿右衛門—にごして—

記録映画社1978年作品

企画=文化庁 製作=古川正思 脚本・演出=山添哲 撮影=金山富男 音楽=長沢勝俊 解説=城達也 カラー 30分

〈かいせつ〉

江戸時代前期以来、酒井田柿右衛門家が代々伝承してきた柿右衛門様式は、日本の代表的な色絵磁器のひとつであるが、その美しさは江戸後期に衰退した「濁手」と呼ばれる優美な磁肌の調整によるところが大きい。第12代・13代柿右衛門父子によって復興されたこの濁手の技法を、工程を追って記録したのが当作品である。13代柿右衛門を中心に職種異なる11人の高度な技術者の手にかかって重要文化財「色絵花鳥文深鉢」が完成されてゆく……。キネ旬ベスト・テン第5位。

日本刀—宮入行平のわざ—

岩波映画製作所1975年作品

企画=文化庁 製作=高橋宏暢 脚本・演出=山内登貴夫 撮影=八木義昭 照明=藤本義門 録音=尾村竜平 音楽=武満徹 解説=伊藤惣一 カラー 35分

〈かいせつ〉

重要無形文化財の刀匠宮入行平の作刀技法を、地鉄の鍛錬法を中心に、一振りの刀が完成されるまで撮影したものである。日本刀は皮鉄・心鉄・刃鉄という異なる三種の鋼によって構成され、心鉄を硬い皮鉄で包み、さらに刃鉄を組み合わせて鍛える「本三枚鍛え」の技法、それらのベースとなる玉鋼を打ち延ばし、藍を入れて何ども折り返して鍛錬する「十文字鍛え」の技法、和鋼・和鉄の古鉄を火床で精錬し直して炭素量を減減し、必要な硬さの鉄を造り出す「卸し鉄」の技法などが紹介されている。

加賀友禪

日本シネセル1975年作品

企画=石川県 制作=佐藤吉彦 脚本=中野剛宣 演出・編集=前田庸宣 撮影=相良国康 音楽=吉田征雄 解説=川久保潔 カラー 20分

〈かいせつ〉

京友禪、東京友禪(江戸小紋)と並んで、その格調高い美しさには定評のある加賀友禪の伝統技法を記録した映画である。その工程は、下絵、糊おき、「友禪をさす」ともいわれる華やかな彩色、地染め、染料を安定させる蒸し、小紋染め、小紋づけ、そして本蒸し、水元などであるが、それぞれに城下町金沢が育んだ300年の伝統技術が冴えわたっている。紫や燕脂、藍などの使い方に巧やかなボカシを用いる加賀友禪独特の色彩や、かつて武家好みといわれた自在な絵模様が印象的である。ベスト・テン第4位。

# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重要視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1980年9月 フィルムセンター

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入れ替え制になります。

一般 200円・学生 140円・小人 100円

10月4日(土) 午後1時開映

——東大寺——

東大寺大仏殿 昭和大修理 <第一部>

岩波映画製作所1975年作品

企画＝清水建設 プロデューサー＝田村勝志 脚本＝田村勝志、神馬玄佐雄 構成・編集＝神馬玄佐雄 現場演出＝谷深 撮影＝西本弘 録音＝鈴木和彦 選曲＝森本喬雄 ナレーター＝竹内三郎 協力＝東大寺 カラー 28分

<かいせつ>

創建以来1200年の歴史を持つ東大寺大仏殿の「昭和大修理」を記録した映画。大屋根の瓦のふきかえを中心とした修復作業の全貌を紹介するもので、この第一部では、須屋根と呼ばれる仮設の覆屋を作る基礎工事を中心に構成している。国宝の大仏殿にはいっさい手をつけずに工事を進めるために案出された、特殊な「スライド工法」とそれに使われる昔ながらのコロが興味深く説明されている。

東大寺大仏殿 昭和大修理 <第二部>

岩波映画製作所1977年作品

企画＝清水建設 プロデューサー＝田村勝志 構成・演出＝神馬玄佐雄 撮影＝成瀬慎一 録音＝鈴木和彦 解説＝竹内三郎 協力＝東大寺、奈良県教育委員会、奈良県瓦工事業協同組合 カラー 28分

<かいせつ>

須屋根に覆われた大仏殿では、昭和50年11月、本工事である瓦のふきかえ工事が本格的に始まった。下層の丸瓦を下ろし、平瓦をはがし、その下の土葺葺板・野地板を取り去り、腐敗のひどい元禄や明治の垂木を新しいものにと変えてゆく。瓦の製造も昔ながらの方法で急がれてゆく。昭和52年秋、この工程は終了した……。1978年度キネマ旬報ベスト・テン第3位。

東大寺大仏殿 昭和大修理 <第三部>

岩波映画製作所1979年作品

企画＝清水建設 プロデューサー＝田村勝志 構成・演出＝神馬玄佐雄 撮影＝成瀬慎一 録音＝末村律律喬 解説＝竹内三郎 協力＝東大寺、奈良県教育委員会、奈良県瓦工事業協同組合 カラー 26分

<かいせつ>

昭和大修理は、いよいよ佳境に入り、下層の瓦葺きから、美しい勾配を如何に出すかに苦勞を要する本工事、さらにその瓦葺きへと移ってゆく。また、明治大修理の際につけられた鳩尾の補修も行なわれ、クレーンを使って設置され、金箔がはられてまばゆい輝きを見る。着工から4年6ヵ月、スライド工法によって須屋根が解体されるにつれて大仏殿がその優美な姿を人々の前に現わしたのは、昭和54年春、桜の満開の時であった。

11月1日(土) 午後1時開映

——愛の世界——

ドキュメンタリー・インドの星

マザー・テレサとその世界

近代映画協会・女子パウロ会1979年作品

企画・製作＝小島好美(近代映画協会)、白井詔子(女子パウロ会) 監督＝千葉茂樹 撮影＝河内豊英、伊藤嘉宏 編集＝近代編集室 音楽＝山崎宏 ナレーター＝米宮良子 録音＝新坂スタジオ 協力＝アリタリア航空、カリス・ジャパン カラー 55分

<かいせつ>

長年にわたり、インド、カルカッタのスラム街で貧しい人々への愛と救済に身を捧げ、1979年にはノーベル平和賞を受けた現代の聖女マザー・テレサ(1910年生まれ)と、彼女の創設した「愛の宣教師たち」のシスター、ブラザーたちの生活と活動を記録して、人間の尊厳、生と死、富と貧困といったテーマを問いつめた意欲作。インドの恥部ともいえるスラム街のフィルム取材に対して、インド政府から異例の許可を得ての撮影は、英国BBC放送局に次ぎ、この作品が2度目のことであり、製作にあたったスタッフたちの真摯な態度が画面の端々までみなぎっており、われわれを深い感動へと誘う。1979年度キネマ旬報ベスト・テン文化映画部門第1位ほか多数を受賞。

やさしいライオン

虫プロダクション1969年作品

製作＝手塚治虫 原作・脚色・作詞・演出＝やなせたかし 撮影＝森昭彦 編集＝松浦典良 動画＝赤堀幹治、中村和子、上口照人、金山明博、松山マヤ、渡辺佳子、内海武雄、山守博昭 背景＝阿土延子、西村邦子、田辺めぐみ 作曲＝磯部俊 編曲＝寺島尚彦 演奏＝寺島尚彦とリズムシャンソネット+ストリングス 歌＝ボニー・ジャックス 声の出演＝久里千春(ブルブル)、増山江威子(ムクムク) カラー 27分 1970年3月21日東宝系封切

<かいせつ>

野外動物園に孤児のライオンがいて、いつも泣いてばかりなのでブルブルと名づけられた。ムクムクという名の牝犬が母親がわりになってブルブルを育てた。成長したブルブルはムクムクと離ればなれにされ、サーカスの人気者になったが、ムクムクを忘れられずに脱走して、町は大騒ぎになった。雪道で老いたムクムクを見つけ駆け寄ったが、その時ブルブルをめぐって警官隊の一斉射撃……。ボニー・ジャックスの歌がストーリーを導くが、なかでも《ブルブルの子守唄》は名曲となった。育ての母犬と優しい子ライオンの愛情の交流が、心暖まるメルヘンの世界を作り出した。大藤賞ほか受賞。

12月6日(土) 午後1時開映

——岡本忠成特集——

モチモチの木

エコー社1972年作品

原作＝斎藤隆介 脚本・演出＝岡本忠成 撮影＝吉岡謙、田村実 編集＝園尚子 人形＝保坂純子、若佐ひろみ、数藤雅三 アニメーション＝尾崎良、藤森誠代、岡本忠成 作曲・演奏＝鶴沢清治 語り＝豊竹呂太夫 カラー 18分

<かいせつ>

寝小便のくせがある億萬な豆太が、急病で倒れた祖父を救おうと、医者を迎えに恐い冬の夜道を走り、霜月三日の夜に「モチモチの木」を見るという話。和紙で統一した画面と、浄瑠璃の語りが印象的。キネ旬ベスト・テン第1位。

チョコタン ぼくのおよめさん

学研A V局1971年作品

製作＝原正次 企画＝石川茂樹 プロデューサー＝神保まつえ、脚本＝岡本忠成、坂間雅子、米道子、田村実 演出＝岡本忠成 撮影＝吉岡謙、田村実 編集＝園尚子 アニメーション＝真賀里文子、秦泉寺博、及川功一 作詞＝蓬萊泰三 作曲＝南安雄 カラー 10分

<かいせつ>

同じクラスのチョコタンが大好きな「ボク」。チョコタンは魚が嫌いなのにボクの家は魚屋。ある日、チョコタンは交通事故で死んでしまう……。関西弁の合唱のせて、子供の素直な心と交通事故の悲劇を表現している。

あれはだれ?

エコー社1976年作品

製作＝茂木正年 原作＝東君平 脚本・演出＝岡本忠成 撮影＝田村実 編集＝相沢尚子 アニメーション＝尾崎良、藤森誠代、吉田悟、峰岸裕和、大向とき子 人形＝保坂純子、石井澄江 音楽＝種口康男 語り＝岸田今日子 カラー 21分

<かいせつ>

毎日新聞連載《おはようどうわ》のアニメ化で、全10話からなるオムニバス作品。「Dog's Heaven」(1967年)等で知られるチェコのヘルミナ・ティルロヴァも使っている毛糸のアニメーションが楽しい。キネ旬ベスト・テン第3位。

ちからばし

エコー社1976年作品

原作＝小泉八雲 脚本・演出＝岡本忠成 撮影＝田村実 編集＝相沢尚子 人形＝保坂純子 アニメーション＝尾崎良、峰岸裕和、大向とき子 音楽＝鶴沢清治 語り＝豊竹呂太夫 カラー 10分

<かいせつ>

小泉八雲著「A Japanese Miscellany」の一篇《梅津忠兵衛》の脚本アニメ化。見知らぬ女から赤児を託された木こりの松吉にふりかかる災難を描いた人形アニメ。岡本の作品歴では異色作といわれている。

# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、時画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇劇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌が見られないでもありませんでした。

しかし、短篇劇映画には「珠玉の短篇」という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇劇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後1時から「短篇・文化・記録映画特集」番組を上映することになりました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1980年12月 フィルムセンター

★先着順にて定員239名に達し次第入館を締め切ります。開館は12時30分。他の特集上映とは全館入れ替え制になります。

一般 200円・学生 140円・小人 100円

## 1月10日(土) 午後1時開映

—アルペール・ラモリス選集—

### 白い馬

Crin blanc le cheval sauvage

仏：フィルム・モンスーリ1952年作品  
原案・監督・脚説執筆＝アルペール・ラモリス 脚本＝ドニ・コロシ・ド・ドナン 撮影＝エドモン・セジャン 音楽＝モーリス・ルルー 出演者＝アラン・エムリ(少年)、パスカル・ラモリス(その弟) 白黒 40分

#### 〈かいせつ〉

映画の詩人と尊称されるアルペール・ラモリス(1922～70)の短篇第3作。南フランスの沼沢地カマルグ地方の大自然を舞台に、そこに群棲する野生馬の中で一際特でた「白いたがみ」と呼ばれる馬と純真な少年との美しい友情を清らかに描き出した傑作。1953年カンヌ国際映画祭短篇グラン・プリ、同年ジャン・ヴィグ賞受賞。

### 赤い風船

Le ballon rouge

仏：フィルム・モンスーリ1955年作品  
製作担当＝ミシェル・ペザン 脚本・監督＝アルペール・ラモリス 撮影＝エドモン・セジャン 音楽＝モーリス・ルルー 出演者＝パスカル・ラモリス、ジョルジュ・セリエ、ウラディミール・ポポフ、ルネ・マリオン、サビーヌ・ラモリス カラー 33分

#### 〈かいせつ〉

「白い馬」に続くカラー短篇で、ジャン・コクトーをして「妖精のいないおとぎ話」と言わしめた作品。パリの古びた下町を背景に赤い風船と少年の不思議な友情の交錯を、風船の動きに人間の感情を仮託するという奇抜な着想で色彩も鮮やかに描いている。1956年のカンヌ国際映画祭短篇グラン・プリ、ルイ・デュク賞、フランス・シネマ大賞、米アカデミー・オリジナル脚本賞などを受賞した。

### パリの空の詩

Paris jamais vu

仏：フィルム・モンスーリ1967年作品  
監督＝アルペール・ラモリス 撮影＝アルペール・ラモリス、ギ・タバリ 解説＝ロジェ・グラジャン カラー 21分

#### 〈かいせつ〉

初の色彩長篇「素晴らしい風船旅行」(1960)で成功した《ヘリヴィジョン》と呼ばれる空中撮影装置を使って、パリの市街を鳥瞰撮影した短篇。日頃は見ることでできないパリの様子を空から捉えた点が異色で、前作の「フィフィ大空に行く」(1964)と同様、大空を飛ぶことに憧れるラモリスらしい作品。動物・子供・飛翔に執着し、そこから優れた詩情を生み出した彼は、この作品を最後に、1970年6月2日他界した。

## 2月7日(土) 午後1時開映

—フランス短篇映画傑作集—

### 幸福な結婚記念日

Heureux anniversaire

仏：コシノール1961年作品  
監督＝ビエール・エテクス 脚本＝ビエール・エテクス、J・C・カリエール 撮影＝ビエール・ルヴァン 音楽＝クロード・スティールマン 出演者＝ビエール・エテクス、ローランス・リニエール、ロベール・プロム 白黒 13分

#### 〈かいせつ〉

コメディアンとしても知られているビエール・エテクス監督(1928年生まれ)の「仲たがいが」(1961)に続く短篇第2作。結婚記念日に急に帰宅しようとする夫が、交通渋滞などに巻き込まれてしまうという騒動を、おもしろおかしく描いたスラップスティック喜劇で、1963年米アカデミー短篇映画賞を受賞した。

### あこがれ

Les mistons

仏：カロス1958年作品  
原作＝モーリス・ボンズ 脚色・監督＝フランソワ・トリュフォー 撮影＝ジャン・マリージュ 音楽＝モーリス・ルルー 解説朗読＝ミシェル・フランソワ 出演者＝ベルナデット・ラフォン、ジェラルド・ブラン 白黒 28分

#### 〈かいせつ〉

意欲的な創作活動を続けているフランソワ・トリュフォー監督(1932年生まれ)のデビュー作となった短篇映画。南フランスの明るく太陽と自然の中で伸び伸びと育ち、愛と性の衝動に目覚め、美しい年上の女性ベルナデットに憧れるようになった5人の少年たちが、大人の愛を覗き見たり空想したりする様子を、微妙な心理の揺れ動きを捉えながら、鮮やかに映像化したもの。

### ふくろうの河

La rivière du hibou

仏：フィルム・デュ・サントール＝フィルムマルティック1961年作品  
原作＝アンブローズ・ピアス 脚色・監督＝ロベール・アンリコ 撮影＝ジャン・ホフェティ 音楽＝アンリ・ラノエ 演奏＝ケニー・クラーク 出演者＝ロジェ・ジャック、アンヌ・コルナリ 白黒 27分

#### 〈かいせつ〉

絞死刑にされる男の死に至る一瞬の意識を拡大したアンブローズ・ピアスの異色短篇《アウル・クリーク橋の事件》の映画化で、ロベール・アンリコ監督(1931年生まれ)の出世作となった。逃走して家族のもとに帰りたいという主人公の願望の映像を、現実の生死の狭間にはさま込むという斬新な実験で話題をまいた。'62年カンヌ映画祭短篇グラン・プリ受賞。

## 3月7日(土) 午後1時開映

—土本典昭選集—

### ある機関助手

岩波映画製作所1962年作品

企画＝日本国有鉄道 製作＝小口植三 脚本・演出＝土本典昭 撮影＝根岸栄 音楽＝三木稔 照明＝松橋仁之、山本茂樹 録音＝安田哲男 解説＝太田正孝 出演者＝中島鷹雄(機関士)、小沼慶三(機関助手) カラー 37分

#### 〈かいせつ〉

〈水俣病〉を告発する一連の優れた記録映画によって知られる土本典昭監督(1928年生まれ)の実質的な処女作となった作品。当時盛んに製作された国鉄のスポンサーによる安全運転のPR映画として企画されたものだが、できあがった作品は、機関士たちの労働の苛酷さを見せつけ、彼らの熟達した技術を讃美するものになり、既に後年の土本らしい人間愛と批判精神を感じとることができる。常盤線の急行みちのく号にスポットを当て、狭い機関室での労働をつぶさに記録すると同時に、乗務以外の生活にも目を向け、それを望遠レンズを多用したダイナミックな疾走する汽車(C62型)の映像と交錯させて、圧倒的な迫力、重量感を創り出している。また、構図の確かさとカメラマンの功績によってSL映画の最高傑作との声価も高い。キネマ旬報ベスト・テン文化映画部門第1位、芸術祭賞、毎日映画コンクール賞、教育映画祭最高賞、ベルリン映画祭青少年向作品賞などを受賞。

### 留学生 チュア スイリン

藤プロダクション1965年作品

企画＝チュア君を守る会 製作＝工藤充 演出＝土本典昭 演出助手＝四宮鉄男 撮影＝瀬川順一、瀬川浩、身内哲男、黒柳満 音楽＝三木稔 打楽器＝田村拓男 録音＝ミネオスタジオ 解説＝大宮悌二 白黒 50分

#### 〈かいせつ〉

政治の思惑によって国費留学生の身分を打ち切られ、大学から除籍され、さらに国費も絶たれてしまった千葉大学に学ぶフランスの留学生チュア君と彼を救おうとして連帯した学生達をカメラで追い、大学当局がチュア君の私費再入学を認めるまでを描いた記録映画で、「ドキュメント・路上」(1963年)に次ぐ土本としては初の自主作品となった。チュア君の復学運動を支援する千葉大学の学生たちと共に、大学構内に泊り込んで撮影されたこのフィルムは、同時進行による強い説得力を持っており、一般公開されなかったが、学生による自主上映ではかなりの利用度があったとされている。また、当時の学生集会の有様が生々しく捉えられており、風俗的な価値もある。ライブチヒ映画祭に出品され好評を博した。